

私は10月28日、松山地方裁判所での「四国電力伊方原発運転差止請求事件」を傍聴しました。全国に広がった1338人の原告団と伊方原発を止める会員は、中国、四国だけでなく近畿、九州からも駆けつけました。幸い私も傍聴でき、意見陳述を聞きながら、東京電力福島第1原発事故からの今日までの思いを再現して、原発の再稼働を許さないとの決意を新たにしました。

広島平和研究所講師の高橋博子さんは「アメリカの公文書から、アメリカがどのように核問題の情報をコントロールしていたかを検証している」歴史学者として、「5歳の子ども」の母親として、東京電力福島第一原発事故による被害がとてつもなく大きいのに、伊方原発が再稼働されようとしていることに対して、大きな怒りを覚え、子供たちのために何とかしなければと思い、原告の一人になった人です。

当時1歳6ヶ月の長男を抱え東京の小金井市で、東電福島事故のニュースを受け、それこそ眠る時間も削って情報収集する中で、テレビからの「ただちに命に影響はない」に専門的知識を持つだけに怒りを持ったであろうことが伝わりました。

「原発事故による影響を大変恐ろしく思い」テレビのコントロールされた報道ではなく、インターネットでの原子量資料室の中継などで深刻さを感じたとの証言からインターネット情報の大切さを改めて認識した。当時知識人、社会的強者ほど東北や東京から避難、米軍の「お友達作戦」も被曝の危険から中止され、現在日本政府を相手に被曝訴訟をしている米軍人もいと聞いている。

「食糧の問題が心配になり、すでに1950年代から核実験やチェルノブイリ原発事故の影響からも、放射線降下物のもたらす食糧汚染が深刻であることを冷静に考え、調査すればするほど深刻さを認識し、決して「想定外」ではなかった。「粉ミルク、水道水から放射線物質が検出された、最悪の事態を想定して備え実行したことが次々と当たってしまう事態に、かえって驚愕した」との陳述に、静岡のお茶から放射線物質が検出されたことを鮮明に思い出した。

「政府、マスコミの専門家は内部被曝を軽視し、外部被曝のみを意識した説明をしていたが、年間20ミリシーベルトもの高線量を学校や保育園などの再開基準にすると発表された。ICRPの1991年勧告でさえ、一般公衆は年間1ミリシーベルトが基準なのに、幼い子どもを含めて、その20倍もの線量基準が導入される、その子供たちのことを思っていたまれない気持ち」との話を聞いて、当時いくらテレビ局に抗議するよう求めた記憶がよみがえった。今思うにこの国は国民の命を守る気が本当にあるのかとさえ思った。

「2011年7月3日に、（直ちに影響はないのは本と？）（ビキニ事件の真実と福島原発被災の今）（軽視される低レベル放射線内部被曝を考える）というシンポジウムで（被曝の証拠として、乳歯が永久歯に生まれ変わるときに乳歯を保存しておく）よう呼びかけた。これに対して、（反原発の方の主張なので、あまり乗る気になれない）とメールに書く県職員など被曝の影響を軽視したり、否定するための工作が実際行われていく」

「私の研究は、いかにアメリカが核兵器の非人道性を見にくくするために原爆や核実験の影響をとりわけ残留放射線や内部被曝を過小評価してきたかの検証すること。つまり、加害者側が自信お積みを少なく見せるために、その影響を過小評価した公式見解しか出てこないことを資料面で見てきたのです。」

「福島原発事故に当たって、全くそれと同じ事が繰り返されたのです。加害者側による隠蔽が繰り返される事に対して、原発事故以来、何度も何度も怒りを感じてきました。小さな子どもを育てながら、また親子とも何度も何度も体調を崩しながらも、訴えてきたつもりですが、いまだこの大事な事実が知られていない」

「原発を再稼働するということは、これから成長していく子土たちを危険にさらすことです。東京電力福島第一原発事故の経験がありながら、どうして、子どもたちを危険にさらせるのでしょうか。まだまだ、被害の全容が明らかになっていないにもかかわらず、どうして原発を再稼働して安全だといえるのでしょうか。放射線によって、最も弱い守られるべき存在を危険にさらします。」

「放射線安全論は、大人の、強い側の核兵器や原発という存在を守るものに過ぎず、人間を守るものでないことは、歴史的資料が示しています。」事実と道理を示しました。

「強い存在を守るのではなく、弱い存在を大事にする判決を、原発ではなく人間の命を、幼い子どもたちを、必死になって成長しようとしている胎児を守るために伊方原発の運転差止の判決を求めます。」と力図よく話しました。

伊方原発の視察に参加して

10月29日、伊方原発視察に参加しました。あまりにも危険との思いを持ちました。

現地の方（近藤誠さん）から細かい路地までご案内していただき、普通は入れない原発北側の道路で、現地を熟知した人が同行しなければ通行できない場所で、原発事故が起きれば避難はできそうにない状況でした。そのために道路の新設（拡幅）が進められています。原発の正門に行くと工事用車両も門を入るまでに30メートルくらいの間に3回停車し点検をされました。

ビジターセンターでは、隣に売店があり、「若い妊婦が店をやっていたが、放射線物質の影響で死産となり店を引き上げた」との話もありました。

緑色片岩（緑色岩石）が展示してあり、原発の敷地が岩盤であるから強いように思いましたが、実はその岩石は泥質の土壌が堆積してできているとの説明がありました。原発が佐多岬半島の入り口の八幡浜を見れば一目瞭然とした土砂崩れ多発地帯です。

伊方原発の北側に位置する国道197号道路の名取トンネルは3号機原発の工事中の平成2年トンネル工事中に大規模な崩壊でトンネルを新たに掘り直したところで、現在も新たな崩壊が進んでいるのが確認できます。

伊方原発で災害訓練が行われ、地元で新聞記者によると、「呉基地から出動した日本に6隻しかない救助船は8時間かかるとの事でしたし、上陸するのに、畳を砂浜に敷かないと利用できないと言われていました。地元の人によると「道路、避難場所に近づけば良いが、動けない人や便利が悪い場所の人はどうにもできない」との報告を聞きました。

伊方原発がある佐多岬半島はメロディーラインが主要幹線で、すべての細い道路でつながっています。半島を二本の活断層が走り、その一本が伊方原発の敷地を通り、他にも瀬戸内海に一本の活断層があると言うことでした。亀ヶ池温泉があり、これも活断層に沿ってあり、火山性ではないとのことでした。

原発の真上を米軍の飛行機が通り去りました。1988年6月に原発から800メートルの一に30トンの米軍ヘリが落下し、米兵7人が死亡する事件を起こしています。